

東ノ谷遺跡発掘調査報告

— 多気郡多気町笠木 —

2014（平成26）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、三重県多気郡多気町笠木に所在する東ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、平成24年度県営かんがい排水事業（宮川1工区地区）に伴って実施した。
3. 調査の体制等は次の通りである。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター　調査研究1課　主幹 伊藤 裕偉
技師 相場さやか

調査期間 平成24年10月30日～12月13日
調査面積 242m²
4. 調査にかかる諸費用は、平成24年度（現地調査）については、工事立会形式のため三重県農林水産部が全額負担した。平成25年度（整理・報告書作成）は、その一部については国庫補助金を受けて県教育委員会が、他の大部分を県農林水産部が負担した。
5. 当報告書の作成は平成25年度業務として実施し、調査研究1課が行った。遺物の撮影は小原雄也が、本書の執筆・編集は相場が行った。
6. 東ノ谷遺跡の発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用頂きたい。

凡　　例

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図「松阪」「国東山」、2006三重県共有デジタル地図（平成23年測図）等を基にしている。
2. 2006三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：三地総合地第93号）。
3. 調査区の座標は、測地成果2000に対応した新座標第VI系で標記している。
4. 本書で示す方位は、すべて座標北を用いている。
5. 土層及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行、1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
6. 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。

S H：堅穴住居　S B：掘立柱建物　S D：溝　　S K：土坑　P i t：柱穴
7. 遺物写真の番号は、遺物実測図の番号と対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。

目 次

I	前言	1
II	位置と環境	4
III	遺構	6
IV	遺物	15
V	調査のまとめ	21

挿 図 一 覧

第1図	遺跡地形図	第9図	B区S H 8・S H 9・ S D 10平面図・断面図
第2図	調査区位置図	第10図	B区S B 16平面図・断面図
第3図	遺跡位置図	第11図	出土遺物実測図（1）
第4図	調査区平面図	第12図	出土遺物実測図（2）
第5図	A区S H 1平面図・断面図	第13図	堅穴住居分布図
第6図	A区S H 12平面図・断面図	第14図	東ノ谷遺跡の堅穴住居
第7図	B区S H 3平面図・断面図		
第8図	B区S H 4平面図・断面図		

表 一 覧

第1表	遺構一覧表	第3表	出土遺物観察表（2）
第2表	出土遺物観察表（1）	第4表	出土遺物観察表（3）

写 真 図 版 一 覧

写真図版1	調査前風景・A区検出状況	写真図版5	S H 4遺物出土状況・主柱穴 S H 3貯蔵穴
写真図版2	A区全景・S H 1	写真図版6	S D 2・S H 8・S D 10・ S H 12作業風景
写真図版3	B区全景（1）（2）（3）	写真図版7	出土遺物（1）
写真図版4	S H 3検出状況 S H 3・S H 4	写真図版8	出土遺物（2）

I 前 言

1 調査に至る経緯

a 遺跡の概要

東ノ谷遺跡は、多気郡多気町笠木に所在する。小字は、A区が西ノ谷、B区が北ノ山である。昭和37年に行われた分布調査では、旧石器時代・縄文時代の遺物が表採され、多気町の遺跡台帳に登録された。遺跡番号はa78番である。

b 事前協議

今回の調査契機は、平成24年度県営かんがい排水事業（宮川1工区地区）で、事業主実施機関は伊勢農林水産商工環境事務所（当時。以下「伊勢農林」）である。事業地内には森出1号墳が該当し、東ノ谷遺跡は付近に給水塔の設置が予定されていた。この段階の給水塔設置予定地は、今回の調査区西方にある送電線鉄塔の南約100mの位置にあたり、この時点では遺跡範囲外であった。

平成24年5月21日に上記給水塔予定地の現地確認を実施したところ、須恵器・土師器の濃密な散布が確認された。このため、平成24年5月28日付で東ノ谷遺跡の埋蔵文化財包蔵地範囲変更（拡大）にかかる事務手続きを、地元の多気町教育委員会と協議の上実施した。あわせて伊勢農林とも協議を実施し、給水塔建設予定地は工事着工前に発掘調査が必要ということで認識を統一した。

同年10月4日には森出1号墳と東ノ谷遺跡西部の範囲確認調査を実施した。いずれも旧宮川用水の配管範囲内で、本調査の必要は無いと判断できた。

10月下旬に至って給水塔の位置が変更となった。その変更位置が、今回の発掘調査対象地である。現地確認をしたところ、この地点には弥生土器と思しき破片が濃密に散布していることが判明した。そのため、範囲確認調査はせずに、そのまま本調査を実施することとなった。

発掘調査は開発工事の受注業者である丸亀産業株式会社が現物供与の形式で実施した。10月30日から開始し、一時中断しつつ、12月13日までの調査となった。

2 文化財保護法に関する諸手続き

発掘調査にかかる文化財保護法の法的手続きは、以下の通り行った。

- ・文化財保護法に基づく三重県埋蔵文化財保護条例 第48条第1項
- 平成24年9月24日付、勢農第3287号（三重県知事から県教育委員会委員長あて）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」
- ・文化財保護法第100条第2項
- 平成25年2月4日付、教委第12-4431号（三重県教育委員会教育長から松阪警察署長あて）「埋蔵文化財の発見・認定について（通知）」

3 発掘調査の経過

a 発掘調査の経過

東ノ谷遺跡の発掘調査は平成24年10月30日から開始した。A区→B区の順に掘削を進め、11月15日に調査が一旦終了した。しかしながら、11月下旬に工事範囲の設計変更が行われ、これを受けてA区の南西側と、B区の一部（SH3東側）を拡張することとなった。したがって、A区・B区とともに遺物の取り上げや全景写真の撮影を2回行なっている。

- 10月30日 重機掘削開始。A区人力掘削完了・全景写真。B区でSH3、SH4検出。
- 10月31日 B区遺構掘削。SH4で甕や壺出土。
- 11月1日 A区は平面図作成。B区は出土状況図作成と遺構掘削。SH3の貯蔵穴を確認。堅穴住居の主柱穴はどれも深い！
- 11月2日 B区平面図・土層断面図作成。SH3は貯蔵穴も深い！
- 11月8日 B区SH3・6掘削。C区SH11掘削。
- 11月9日 SH7で貼床確認。
- 11月12日 SH8・SH9・SD10掘削。
- 11月13日 B区清掃、全景写真、平面図作成。
- 11月15日 B区重機掘削。調査区から東側は、遺構がないことを確認。
- 12月4日 工事の都合上、調査範囲が拡大する。A

区の拡張。S H12を検出し、S D 2が堅穴住居の排水溝になることを確認。

12月5日 A区掘削完了、平面図作成。B区の拡張開始、S H 4で遺物多数出土。

12月7日 B区S H 4掘削。壺や鉢など良好に残る。

12月10日 S H 3掘削。

12月11日 遺物出土状況図の作成、遺物取り上げ。

12月12日 平面図作成、遺物取り上げ、全景写真。

12月13日 平面図作成、調査終了。

b 発掘調査の普及・公開

調査は工事立会調査という形式であったため、現地説明会は開催できなかった。調査終了後、三重県埋蔵文化財センターHPにおいて、発掘調査情報を提供した。また、2013年3月9日（土）に行われた「おもろいもん出ましたんやわ@三重2012」（発掘調査成果報告会）で遺物の展示および解説を行った。

4 発掘調査の方法

a 挖削の方法

前述のとおり、調査対象範囲の地表面には遺物の散布が多く認められ、遺構の存在が確実と考えられたため、事前の範囲確認調査は実施しなかった。

発掘調査では、まず表土全体を重機掘削し、遺構の検出および掘削は人力で行った。B区の北半には、東西方向に調査区を縦断するかく乱がみられたため、これらは重機掘削によって除去していった。このかく乱は、堅穴住居S H 7の上面を削り、堅穴住居S H 8の上面および中央を破壊しており、当時の重機の爪跡が残っていたことから、おそらく昭和の段階で農道の整備が行われ、その際に遺構面を削平したものと考えられる。

また、調査区のいたるところに正方形の土坑がみられるが、これは近現代のかく乱で、植栽などが原因と考えられる。

残土は工事用地内から搬出できず置き場に限界があったため、B区は3分割しての調査となつた。

b 調査区の設定

工事の施工箇所によって調査区を設定し、配水槽

建築予定地をA区、そこから派生する水路をB区とした。また、本来の工事施工範囲はA区・B区のみであるが、工事の都合上、付近の植栽を移動した際に堅穴住居が不時発見されたため、便宜上これをC区とした。

通常、本調査では4 m × 4 mのグリッド単位で1/40略測図（遺構カード）の作成および遺物の取り上げを行うが、東ノ谷遺跡発掘調査は工事立会の形で実施し、早急な対応が求められたため、グリッド単位の略測図は作成せず、調査区ごとに適宜略図を作成し、遺構の把握に努めた。

調査の経過で述べたとおり、A区・B区ともに調査区の拡幅を行っているため、同一遺構であっても遺物の取り上げ月日が大幅に異なる場合がある。

c 遺構番号

遺構番号は、基本的に埋土中から遺物が出土した遺構のみに付与している。遺構の種類に関わらず、1から順に通番で番号を付与し、番号の前に遺構の性格を表すSHなどの略称を冠した。ただし、ピットについては、A区・B区の区別なく別途1から順に番号を付与した。

d 実測

調査区の土層断面図および平面図の作成は、1/20縮尺で手書き実測した。遺物出土状況は、1/10縮尺で手書き実測を行った。

e 遺構写真撮影

遺構関連の写真は、調査区全景写真は6×7判で撮影し、調査の進捗状況などを中心とした細かな記録は35mm判を撮影した。フィルムは白黒とスライドを同時に作成し、デジタル画像も適宜撮影した。

5 整理作業の方法

a 遺物類の整理

出土遺物は、担当者が報告書掲載遺物およびその参考資料（A遺物）と未掲載遺物（B遺物）に区分した。

b 遺物写真撮影

報告書掲載遺物から任意に選択し、6×7判の白黒ネガフィルムで撮影を行つた。



第1図 遺跡地形図 (1 : 10,000)



第2図 調査区位置図 (1 : 2,000)

II 位置と環境

1 地理的環境

東ノ谷遺跡（1）は、多気郡多気町笠木に所在する。小字は、A区が西ノ谷、B区が北ノ山である。

多気町東部から明和町南部にかけては、標高40～100mの小規模な丘陵がひしめき合って、ひとつの丘陵地帯を形成している。浅間丘陵・玉城丘陵から流出する佐奈川は、低位段丘と山麓部に挟まれた低地に狭長な谷間に低平地を形成しており、今回調査を行った東ノ谷遺跡のある小丘陵も、佐奈川と外城田川の間に形成された小さな谷間に面している。

調査区の標高は41～43mで、北に水田をひかえた小丘陵の緩斜面に遺跡が展開しており、水田との標高差は4mほどである。

2 歴史的環境

東ノ谷遺跡は、昭和37年に旧石器時代から弥生時代の遺物が採集されている。旧石器時代の遺物は、細石刃・石核・スクレーバー・親指型搔器である。縄文時代の遺物は石錘・石皿・すり石・石斧・土器片である。弥生時代の遺物は、土器片・土錘・壺である。今回の発掘調査では弥生時代後期の遺構が確認され、表探遺物には須恵器・灰釉陶器がみられる。

多気町には、旧石器時代から近世にいたるまで、多くの遺跡や墓跡・社寺が点在するが、ここでは東ノ谷遺跡に関わりのある旧石器時代から古墳時代に焦点をしほって記述することとした。

旧石器時代 当該地は、三重県内でも比較的多くの採集遺物が見つかっている地域である。三川遺跡（2）、平林遺跡（3）では、ナイフ形石器や縦長洞片が採集される。サソダ遺跡（4）やナゴサ遺跡（5）では、旧石器時代から弥生時代にかけての土器・石器が散布している。

縄文時代 玉城丘陵周辺で多数の遺跡が確認される。早期から草創期にかけては、鴻ノ木遺跡（6）、坂倉遺跡（7）、牟山遺跡（8）などが代表的である。縄文時代前期から中期前半の遺跡はほとんど確認されないが、後期から晩期にかけては櫛田川・祓

川沿いの沖積地に遺跡が展開し、金剛坂遺跡（9）やコドノA遺跡（10）で遺構・遺物が多く確認される。台地上に位置する森莊川浦遺跡（11）は、発掘調査によって後晩期を中心とした時期の遺跡であったことがわかった。このほか、笠木地区では二ツ山遺跡（12）、向野遺跡（13）で遺物が採集されており、外城田川流域には畠ノ田遺跡（14）、与五郎谷遺跡（15）、マイラ遺跡（16）が分布する。

弥生時代 弥生時代前期の集落は台地や沖積平野に多くみられ、丘陵部の遺跡は少ない。

後期から終末期にかけて遺跡数は増加し、沖積平野では金剛坂遺跡や北野遺跡などで大規模な集落や方形周溝墓が形成される。上ノ垣外遺跡（17）では、終末期の前方後方型周溝墓が見つかっている。一方丘陵周辺をみてみると、大規模な集落は認められないものの採集遺物が散見し、発掘調査でも点的に遺物が出土している。東ノ谷遺跡周辺の調査事例では、平林東遺跡（18）で弥生時代後期の土器が確認される。また、大谷遺跡（19）では木製品加工に伴うと考えられる終末期の施設がみられる。東ノ谷遺跡の東方約1kmにあたる堤遺跡（20）からは、後期の壺が出土している。

古墳時代 当該地は、南勢地域における最大の古墳密集地帯である。丘陵上では、5世紀前半の大型方墳である椎現山2号墳（21）を初現とし、高塚1号墳（22）、大塚1号墳（23）など、首長墓に相当する帆立貝式の大型古墳が造営される。6世紀以降は、櫛田川流域で黒田山古墳群（24）、明気古墳群（25）、立岡山古墳群（26）、大日山古墳群（27）、石塚谷古墳（28）がある。玉城丘陵には、斎宮池古墳群（29）、天王山古墳群（30）、神前山古墳群（31）、大塚古墳群（32）、河田古墳群（33）、上村池古墳群（34）、エブミ古墳群（35）、中山古墳群（36）、朝久田古墳群（37）、女山古墳群（38）など、同一の丘陵に複数の大きなまとまりが確認できる。東ノ谷遺跡の同一丘陵上には森出古墳群（39）があり、ほ場整備で消滅した7号墳は10.8m×12.2mの方墳で、7世紀後半の須恵器が見つかっている。調査区対岸

の丘陵上には杉谷古墳（40）、浅間山古墳（41）が単独でみられるが、時期は不明である。なお、東ノ谷遺跡南西部にも須恵器・土師器片が濃密に分布しており、削平された古墳が存在している可能性が高い。

玉城丘陵周辺は須恵器生産が盛んな地域としても知られている。東ノ谷遺跡と同一丘陵上に位置する北ノ山窯跡（42）のうち、A号窯は、外城田窯址群のなかで最も早く6世紀前半から7世紀後半に操業していることが特筆される。笠本地内には南ノ山窯跡（43）、長安寺窯跡群（44）があり、これらの操業期間は7世紀代を中心とする。続いて7世紀後半から8世紀中葉には原窯跡（45）、市原窯跡（46）がみられる。一方、郷田川右岸の丘陵部では、7世紀中葉に明気窯跡（47）、中尾窯跡（48）が操業しており、当該地域内における窯業生産の発展と古墳群の形成との関連性が指摘されている。¹¹⁾

【註】

- (1) 洋生卓司2005「伊勢南部の須恵器生産－外城田窯址群の検討－」『Mie history』Vol.16

【主要参考文献】

- ・多気町教育委員会編1992「多気町史」通史
- ・玉城町史編纂委員会編1995「玉城町史」上巻
- ・三重県2008『三重県史』資料編考古2
- ・多気町教育委員会1974「埋蔵文化財調査報告 女山4号墳・長迫間A遺跡・長迫間B道路」
- ・三重県埋蔵文化財センター 1995『明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・巣渡遺跡』
- ・三重県埋蔵文化財センター 2008『平林東道路発掘調査報告』
- ・三重県埋蔵文化財センター 2009『丁長遺跡（第1次）・大谷遺跡（第1・2次）発掘調査報告』
- ・三重県埋蔵文化財センター 2010『小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告』



第3図 遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院「松阪」「国東山」1：25,000）

III 遺構

1 基本層序

東ノ谷遺跡は、標高50mほどの小規模な丘陵の東側に形成された平坦面に位置し、調査区はその平坦面から緩やかに北勾配をとる地形の変化点にある。A区は最も標高が高く安定した平坦面に位置し、遺構検出面の標高は43.0mである。B区の遺構検出面の標高は大きく二分され、斜面の上にあたるS H 3やS H 4付近では42.2m、一方斜面の下にあたるS H 8付近では41.2mで、この1mの差は元々の高低差のほか、昭和の耕地整備によるものと考えられる。昭和の耕地整備によって削られたA区やB区S H 7～8付近は、堅穴住居の貼床や壁際溝⁽¹⁾がかろうじて残っている状況であった。比較的遺構が良好に残存していたS H 4では床面直上から遺物が出土したが、その他の堅穴住居では遺構とともに遺物も削平された可能性が高い。

基本層序は、上から表土、包含層にあたる褐色土、遺構検出面にあたる明赤褐色粘土層である。表土の厚さはいずれの調査区でも約10cmである。包含層は、A区や、斜面の下にあるB区S H 7付近は10cmと薄いが、比較的残存状況の良いB区南側では35cmの堆積がみられた。

遺構埋土は主に赤褐色～褐色粘土で、色調は地山と同一である。主柱穴や貯蔵穴の埋土には、ベースブロックが多くみられた。

2 検出された遺構

今回の調査では、堅穴住居10棟、掘立柱建物1棟のほか、堅穴住居に伴うと考えられる溝や土坑など、計16基の遺構が検出された（第1表）。これらはすべてが弥生時代終末期⁽²⁾の遺構である。

a 堅穴住居・排水溝

S H 1（第5図） A区北側で検出した堅穴住居である。平面形は3.7m×3.7mの正方形プランで、主軸は北からやや西に振る。住居北側に焼土がみられる。住居面積は推定13.7m²で、掘り込みの深さは後世の削平により不明である。全体の規模を確認する

ため調査区を拡張したところ、住居の北東隅を検出できたが、北西隅はかく乱により不明瞭であった。

調査区内で検出した2つの主柱穴は住居内でもやや南寄りに設けられており（第5図b-b'）、これを北側の主柱穴想定位置と結ぶと12m×2m以上の長方形となる。これら主柱穴は控え柱が伴っている。壁際溝内にある多数の小ビットも住居を構成するものと考えられ、壁などの施設が想定される。住居の南西隅は、壁際溝に向かって緩やかに傾斜している。

埋土から甕体部片、壺口縁片などのほか、甕と考えられる穿孔された底部（第11図1）が出土しており、時期は弥生時代終末期である。

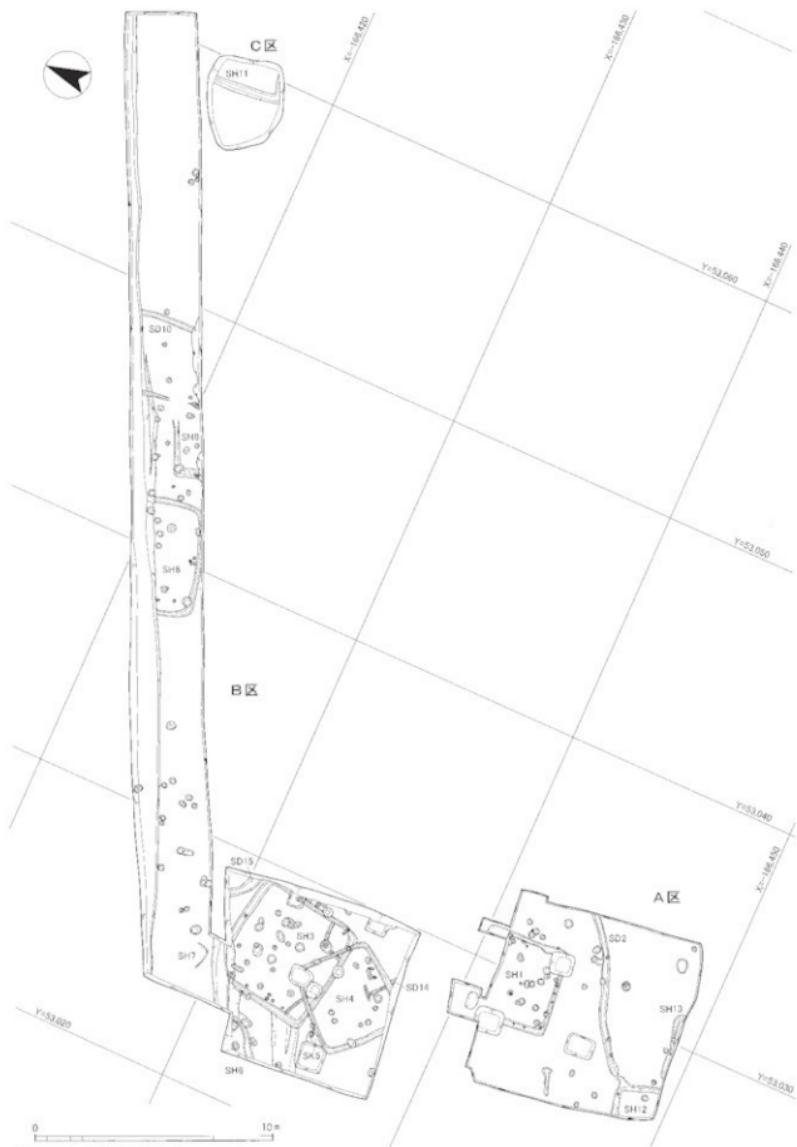
S H 3（第7図） B区南側で検出した堅穴住居で、正方形を呈する。今回検出した堅穴住居のなかでは、S H 3とS H 8が一回り大きい。重複関係はS H 3→S H 4→S B 16で、S H 3を掘削したのち、S H 4の床面を検出した。

主柱穴は40cmほど深く掘り込まれており、柱間は2.5mである。主柱穴に開まれた住居の中央付近に炉と考えられる焼土がみられ、貼床も同じ範囲に認められた。主柱穴を境として南東隅を区画する間仕切り溝を検出したが、ここには貼床は見られなかった。壁際溝の小ビットは、住居を構成するものと考えられ、壁などの施設が想定される。

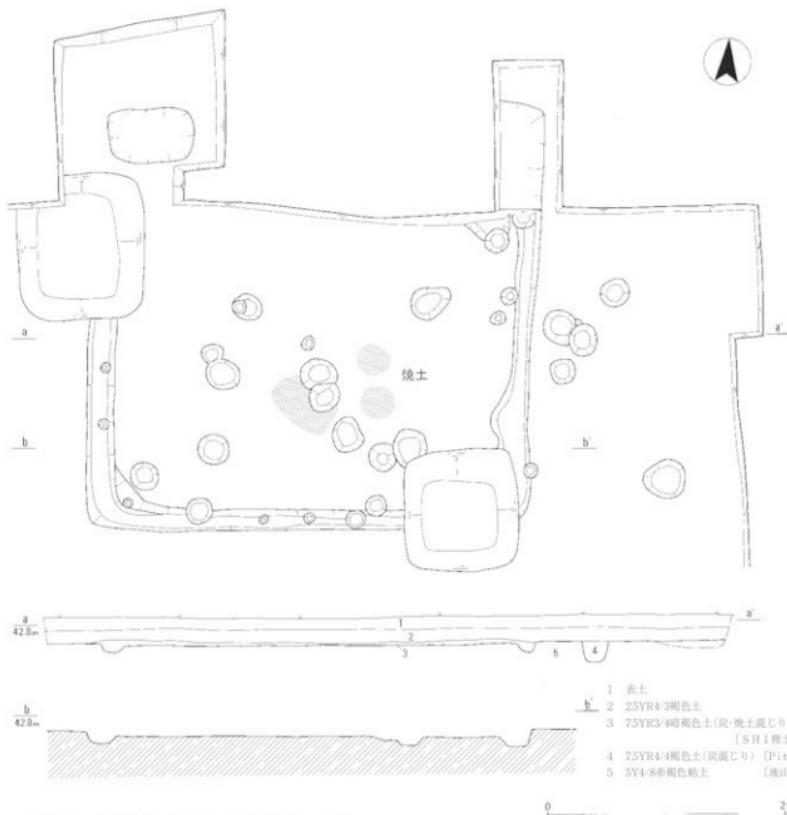
このほか、住居の南辺中央部で貯蔵穴を検出した。長径75cm、深さ70cmで、底に平坦面を持った逆台形状を呈する。貯蔵穴からは、南東隅の間仕切り溝同様の小溝が壁際溝方向に伸びており、区画された範囲に焼土がみられた。

床面および貯蔵穴からはほとんど遺物が出土しなかった。埋土からは底部穿孔された甕、台付甕、高壺が出土している。

S H 4（第8図） B区南側で検出した堅穴住居で、正方形を呈する。重複関係はS H 3→S H 4→S B 16で、S H 3が埋没したのちS H 4が建てられている。S H 4はほとんど削平を受けておらず、床面直上の褐色粘土層で土器類が多数出土し、その上を赤褐色粘土層が覆っている。



第4図 調査区平面図 (1 : 200)



第5図 A区SH1 平面図・断面図 (1:40)

壁際溝の深さは遺構検出面から36cmで、壁際溝外側の壁は垂直に落ち、住居側に緩やかに立ち上がる(第8図b-b')。主柱穴の柱間は約2m間隔で3方にみられたが、残り1つは確認できなかった(第8図a-a'、c-c')。主柱穴の深さは、東側と南側は約20cmと浅く、西側は約60cmと非常に深い。南東辺周辺では、住居内を画する間仕切り溝と考えられる小溝が認められた。

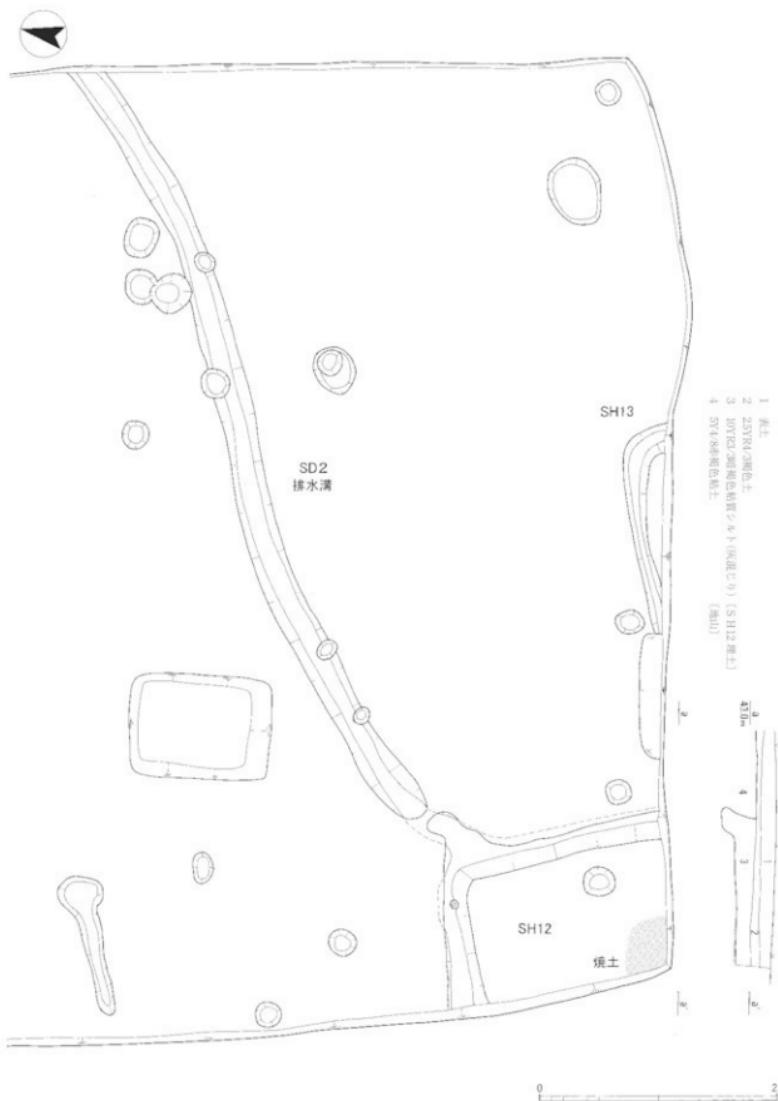
遺物は住居の中心を外し、その周辺でまばらに出土しているが、床面の硬化が認められた住居北隅には遺物あまりがみられなかった。ほぼ完形の高坏

(31)は、壁際溝に沿うように住居の端で出土した。

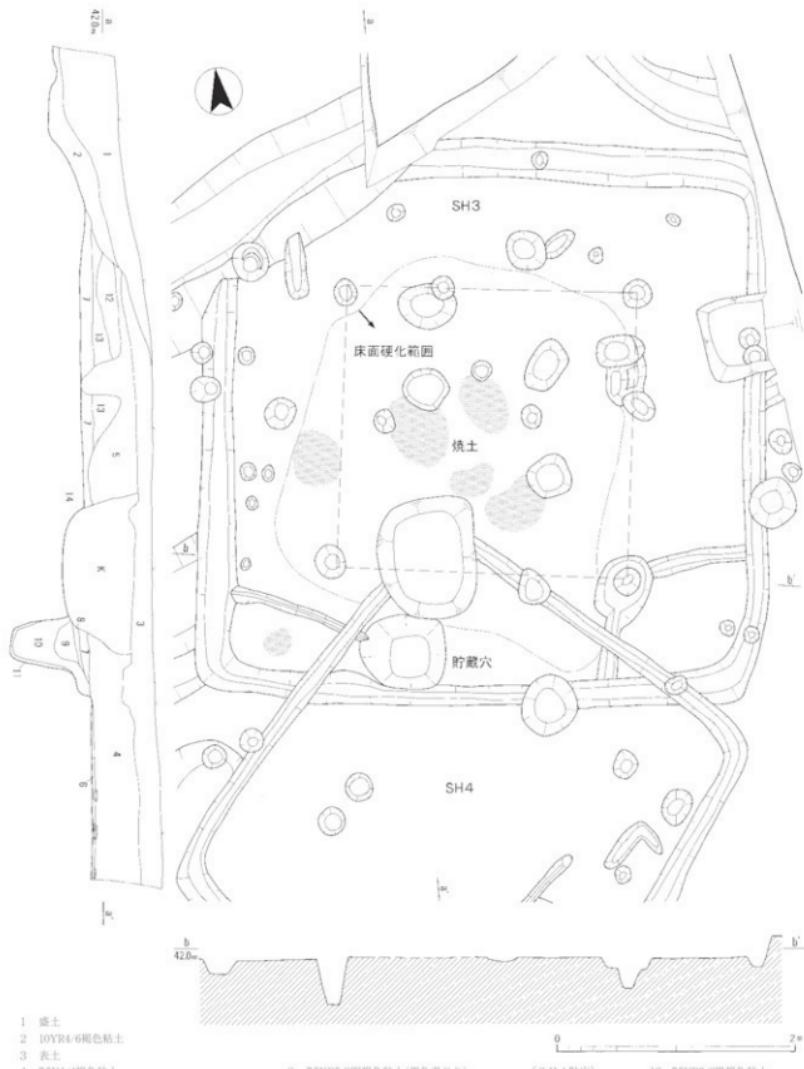
S H 4 の時期は、S字状口縁台付壺(以下、「S字壺」)A類や高坏の形態から弥生時代終末期にあたる廻間I式後半段階と考えられる。

S H 6 (第4図) S H 3 の西側に位置し、南東端で壁際溝のみを検出した。埋土の状況から堅穴住居と判断した。壁際溝周辺の小ピットも、住居を構成するものと考えられ、壁などの施設が想定される。

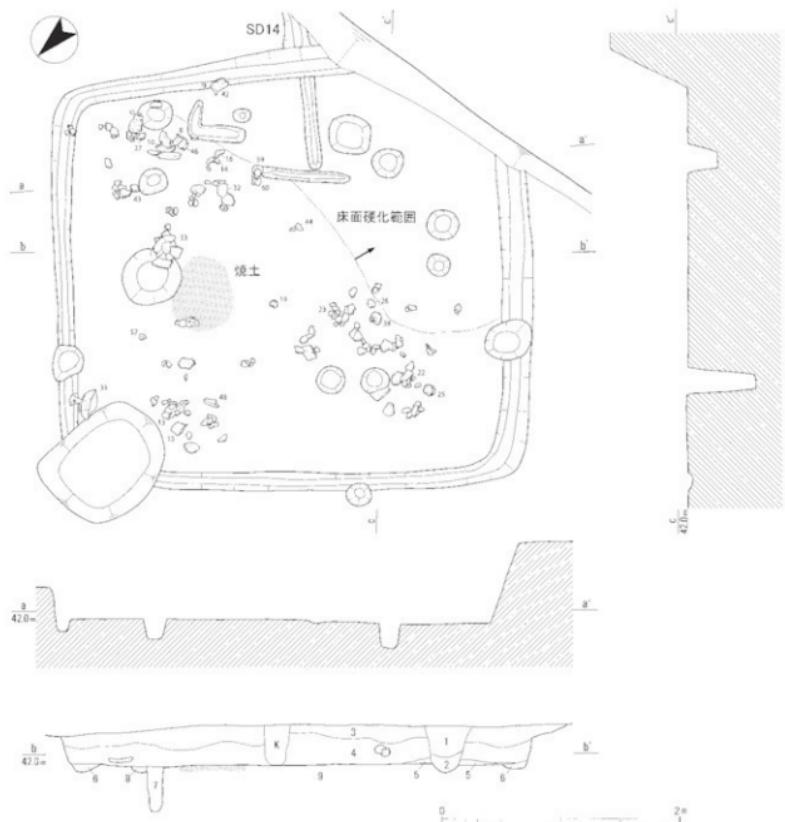
出土遺物は微量であるが、台付壺の脚台部片や口縁部片が出土しており、遺構の時期は弥生時代終末期であろう。



第6図 A区SH12 平面図・断面図 (1:40)

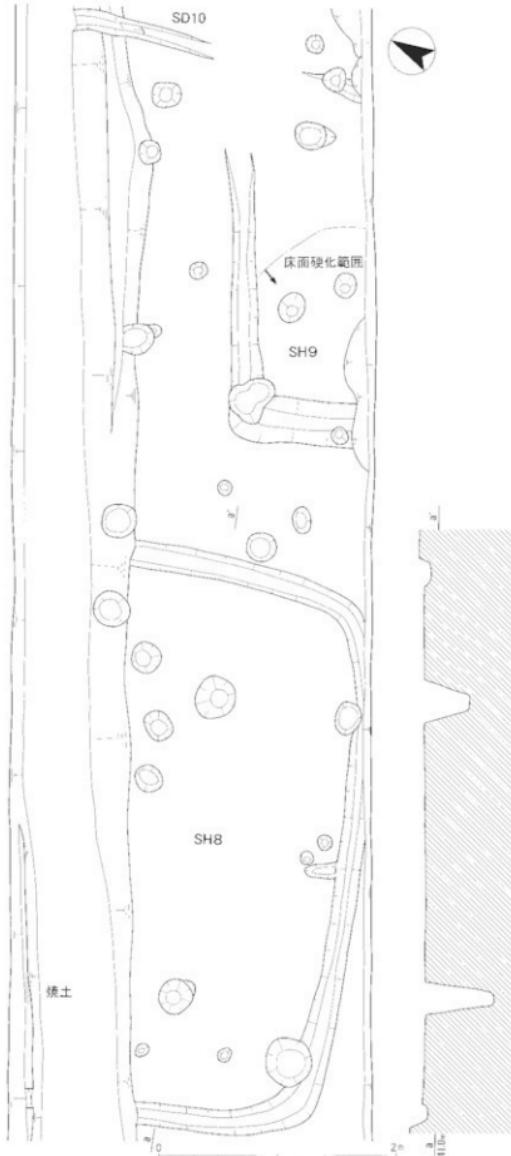


第7図 B区SH3 平面図・断面図 (1 : 40)



- | | |
|-------------------------------|---------------|
| 1 10YR3-1黒褐色粘質土 | [S B16に伴うPit] |
| 2 10YR5-1褐色灰化土(ベースブロック40%含む) | |
| 3 5YR5-6明赤褐色粘土 | [S H 4上層] |
| 4 2.5YH4-3褐色粘土(土器・瓦混じり) | [S H 4下層] |
| 5 2.5Y6-4に3.5Y6-4黄色シルト | [S H 4粘床] |
| 6 7.5YR5-6褐色土 | [S H 4根際溝] |
| 7 10YR5-2灰褐色褐色粘土(ベースブロック7%含む) | [Pit] |
| 8 10YR5-3暗褐色土 | [S H 3根際溝] |
| 9 5Y5-3暗赤褐色粘土 | [地山] |
| K かく乱 | |

第8図 B区 S H 4 平面図・断面図 (1 : 40)



第9図 B区 SH8・SH9・SH10 平面図・断面図 (1 : 40)

SH7 (第4図) B区東端で検出した竪穴住居である。現代の擾乱によって大部分が破壊されていたため規模や形態は不明であるが、南隅の壁際溝と考えられる落ち込み状の溝と、そこから北に向かって床面の硬化が確認された。遺構の検出時点では、かろうじて住居埋土のラインが確認できた。

時期は不明だが、SH3と近接していることから、少なくともSH3とは時期差があるものと思われる。

SH8 (第9図) B区のほぼ中央部で検出した竪穴住居である。調査区内では全体の半分を確認し、平面形は正方形をなすものと推測される。一辺約5mで、東ノ谷遺跡で検出された竪穴住居の中では、大型のものである。調査区を縦断する形で重機のバケットによるかく乱が走っているが、北側法面でかく乱が途切れたことにより、僅かながら壁際溝および焼土が確認された。

2つ検出した主柱穴の間隔は25mで、深さは40~60cmを測る(第9図a-a')。この竪穴住居は上面が削平されていることから、主柱穴は本来もっと深いものであった可能性が高い。また、壁際溝の内側にある柱穴や小ピットは、住居を構成するものと考えられる。

埋土から甕と高坏が出土しており、時期は弥生時代終末期である。

SH9 (第9図) B区SH8の東側で検出した竪穴住居である。全体的に上面が削平されており、東隅の壁際溝のみ検出した。南側に向かって床面の硬化が認める。

出土遺物は認められなかったものの、竪穴住居の形態から、時期は他の遺構と同じく弥生時代終末期と考

えられる。

S D 10 (第9図) 北に向かって緩やかに傾斜していく溝で、検出時はトンネル状を呈していた。時期は不明であるが、S D 2と同じく排水溝である可能性が高く、S H 9、もしくはS H 9の南側にある堅穴住居に伴うものと考えられる。

S H 11 (第4図) C区で検出した堅穴住居で、堅際溝の南西隅を検出した。B区に統くと推測されたが、削平されており北側は検出できなかつた。床面には、僅かではあるが焼土と貼床が認められた。

B区に比べ一段高い平坦面に位置し、耕地整備による農道の削平を受けていないため、比較的遺物の残存状況が良い。大型の壺(第12図65)は、床面の直上で1個体分が割れた状態で出土した。そのほか、S字甕A類(同67)が出土しており、時期は弥生時代終末期である。

S H 12・S D 2 (第6図) A区南西端で検出した堅穴住居で、堅際溝の北東隅から北東方向に排水溝S D 2が伸びる。住居北西端で焼土を検出した。

堅際溝の形状は、住居側はなだらかな法面を持ち、壁側は垂直もしくはオーバーハング気味に立ち上がるが特徴である(第6図a-a')。

堅際溝の北東隅から伸びる排水溝S D 2は、幅約30cmである。住居と接する点でトンネル状を呈しており、おそらく使用時には住居内部の堅際溝と外部を地中でつないで排水するような施設であったと想定される。調査区内の全長は約7mで、調査区外に続いている。

出土遺物は少なく、高坏(第12図71)のほか甕の部品がみられる。

S H 13 (第6図) A区南端で検出した堅穴住居で、北端のみを検出した。大部分が調査区外に存在しているため、全体の規模や形態は不明である。

A区S H 12に近接していることから、これらは時期差があると考えられるが、重複関係は不明である。

b 挖立柱建物

S B 16 (第10図) B区南部の堅穴住上面で検出した掘立柱建物である。梁行2間分と、桁行3間分を検出したが、造構は調査区西側に統くため正確

な規模は不明である。柱間は棟行で24m、桁行で2m、建物の主軸はほぼ北である。

重複関係はS H 3→S H 4→S B 16で、堅穴住居が埋没したのち建てられたものである。出土遺物は土器片のみであるが、時期は弥生時代終末期の範疇におさまるものと考えられ、堅穴住居群との時期差はわずかであったと推測される。

また、S B 16を構成する柱穴以外のビットからも、堅穴住居とはほぼ同時期の遺物が出土していることから、複数棟の掘立柱建物があった可能性がある。

c 土坑

S K 5 (第4図) B区南部で検出された円形の土坑で、深さは0.17mであるが、S H 4と近現代の方形土坑によって削平されており全体像は不明である。S H 4と重複しているが、時期は概ね弥生時代終末期の範疇におさまるものとみられる。

d 溝

S D 14 (第8図) B区南辺で検出した溝である。北に向かって傾斜するもので、埋土や周辺の状況から、S H 1などの堅穴住居に伴う排水溝の可能性があると考えられる。

出土遺物はみられなかった。

S D 15 (第4図) B区西側で検出した溝である。付近の堅際溝に比べやや幅の広い逆台形形状を呈していることから、住居に伴う堅周溝ではないと判断した。出土遺物がないため時期は不明であるが、造構埋土は弥生時代終末期の造構と同じである。

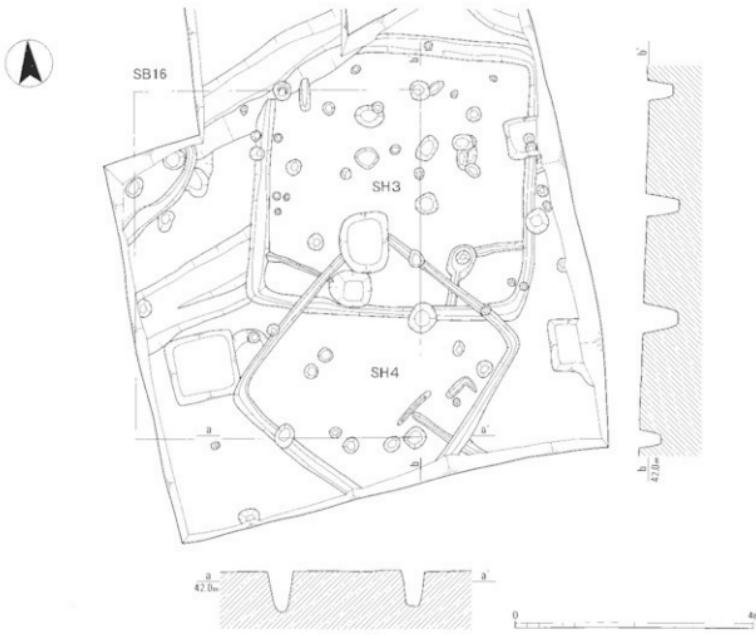
【註】

(1) 堅際溝、甕溝、堅周溝等の用語があるが(文化庁文化財部記念課監修・独立行政法人国立文化機構奈良文化財研究所編2010「発掘調査のてびき」同成社)、本報告では「堅際溝」の用語を用いた。ただし、調査時は「堅際溝」の用語を用いている。

(2) 土器の様式、時期区分は以下の文献による。なお本稿で扱う弥生時代終末期とは、上村氏の第VI様式とそれをやや超える範囲、赤塚氏の遡回II式までを含む。

・赤塚次郎1990「考察」「遡回遺跡」愛知県埋蔵文化財センター

・上村安生2002「伊勢・伊賀地域」「弥生土器の様式と編年」木耳社



第10図 B区SB16平面図・断面図 (1:80)

第1表 遺構一覧表

遺構名	形態	地区	図版番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	時期	SH壁際溝	備考
SH 1	堅穴住居	A区	第5図	3.7	3.7	0.07	弥生時代終末期	有	壁際溝幅4cm、住居面積13.7m ² (推定)。 地土あり。
SD 2	排水溝	A区	第6図	7.3	0.3	0.15	弥生時代終末期	-	SH12の跡水溝で、トンネル状を呈する。
SH 3	堅穴住居	B区	第7図	4.8	4.8	0.39	弥生時代終末期	有	壁際溝幅9cm、住居面積22m ² 。貼床、地土あり。 南北中央に防護穴あり。重複関係はSH3→SH4。
SH 4	堅穴住居	B区	第8図	4.0	3.7	0.8	弥生時代終末期	有	壁際溝幅9cm、住居面積14.6m ² 。貼床、地土あり。 床面直下で遺物多く出土。野晒穴なし。
SK 5	土坑	B区	第4図	0.9	0.6	0.17	弥生時代終末期	-	重複関係はSK5→SH4。
SH 6	堅穴住居	B区	第4図	2.0	0.8	0.19	弥生時代終末期	有	壁際溝幅20cm。
SH 7	堅穴住居	B区	第4図	3.0	2.0	0.07	弥生時代終末期	有	上面削平される。貼床あり。
SH 8	堅穴住居	B区	第9図	4.9	2.9	0.1	弥生時代終末期	有	上面削平される。壁際溝幅20cm、住居面積24m ² (推定)。 貼床、地土あり。
SH 9	堅穴住居	B区	第9図	2.5	1.3	0.05	弥生時代終末期	有	上面削平される。貼床あり。排水溝SD10を伴う。
SD 10	排水溝	B区	第9図	1.2	0.15	0.1	弥生時代終末期	-	SH9の跡水溝で、トンネル状を呈する。 北に向かって水が落ちるよう傾くように設けられている。
SH11	堅穴住居	C区	第4図	3.0	1.4	0.14	弥生時代終末期	有	排水溝SD2を伴う。
SH12	堅穴住居	A区	第6図	1.8	1.4	0.15	弥生時代終末期	有	排水溝SD2を伴う。
SH13	堅穴住居	A区	第6図	0.4	1.7	0.08	弥生時代終末期	有	北東隅を検出。壁際溝幅13cm。
SD14	排水溝	B区	第8図	0.4	2.2	0.29	弥生時代終末期	有	堅穴住居の排水溝。
SD15	溝	B区	第4図	1.6	0.45	0.17	弥生時代終末期	-	東西溝を検出。壁際溝幅15cm。 地土あり。
SB16	掘立柱建物	B区	第10図	5.8	4.8	0.4	弥生時代終末期	-	SH4の上面で検出。 重複関係はSH3→SH4→SB16。

IV 遺 物

1 出土遺物の概要

東ノ谷遺跡出土遺物は、コンテナケースで13箱、総重量23.0kgである。遺構に伴う土器はすべて弥生土器⁽¹⁾で、調査区周辺から表探した遺物に須恵器、灰釉陶器が含まれている。

2 竪穴住居出土遺物

S H 1 出土遺物(1) 1は弥生土器の底部片で、底部の内から外に向て焼成前穿孔が複数みられるため、瓶のような用途が想定される。

S H 3 出土遺物(2~6) 2~5は弥生土器である。2は壺で、底部に焼成前穿孔がみられる。3~4は壺の脚台部で、3は外面ともにハケによって調整される。5は高坏の坏部で、風化しているため調整は不明である。6は石器加工時に発生した剥片と考えられ、混入品と思われる。

S H 4 出土遺物(7~61) 7~61は、すべて弥生土器である。7~11は頭部に突帯が巡る広口壺で、口縁端部に面を持つもの。8は口縁部外面に粘土帯を貼り付けた痕跡があり、9も同様の形態をとる可能性がある。11は口縁端部を上方に摘み上げる。12~16は加装を伴わない広口壺で、外面ともにナデ調整が施されるが、全体的に風化している。17は短頭壺で、外面ともにナデ調整し、頭部には外面から内面方向に焼成前穿孔が2カ所みられる。18は外面に円形浮文がつくもので、加飾壺の肩部であろうか。19~28は壺の底部である。19~23は底部外面中央がやや凹むもの、24~28は底部外面が平底のもの。28は底部外面をハケによって調整する。29はミニチュアの壺で、ナデによって成形される。30は鉢ないしは壺の底部で、底部外面中央が凹む形態をとる。

31~41は高坏である。31はほぼ完形で、口縁端部が内傾し、坏部が深く、稜以上が内湾するもので、脚部がわずかに内湾する。32は浅い坏部で、外面にタテ方向のミガキ調整がみられる。34は小型の高坏で、坏部外面に明瞭な稜をもつ。35は柱状を呈する脚部で、やや古い様相を示すことから混入品の

可能性がある。これらの外面調整は、32の坏部にミガキ調整がみられることから、本来31・33もミガキ調整であったと考えられるが、表面が風化しており観察することはできない。31・35~37は脚部上半部の外面に櫛搔きによる直線文が施される。

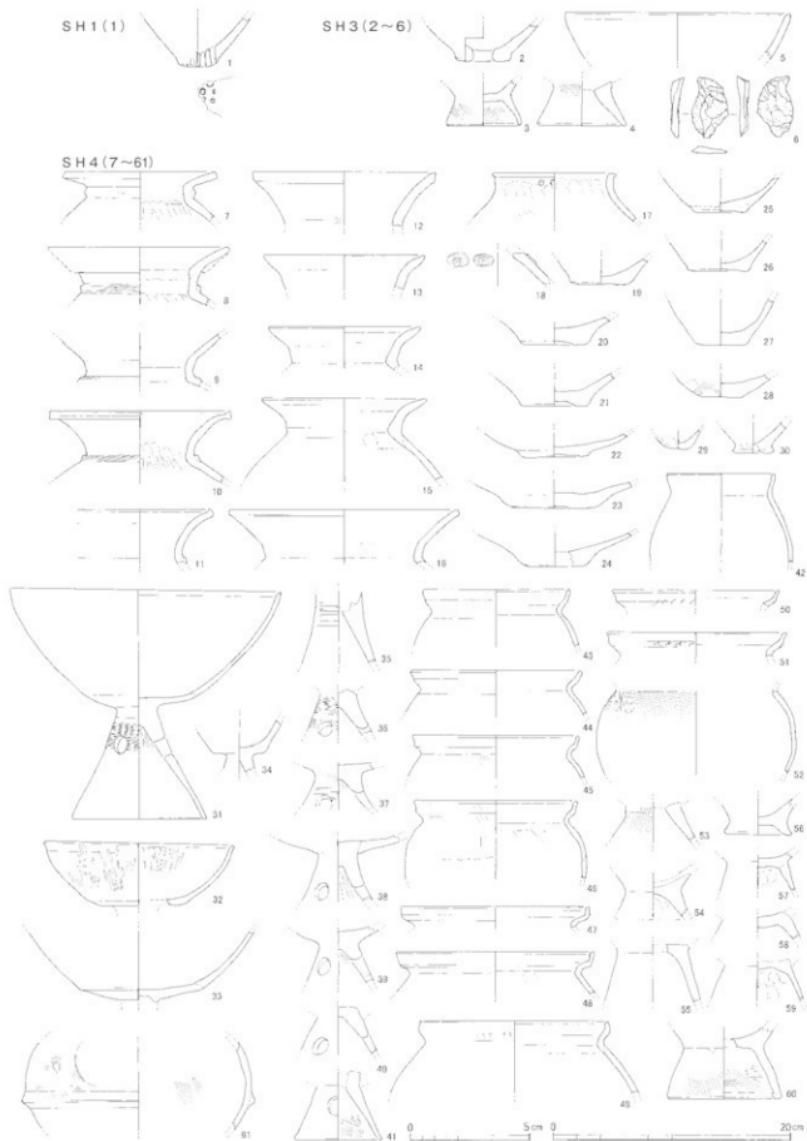
42~60は壺である。42~49は受口状口縁壺で、42~46は口縁部が緩やかに立ち上がるものの、47~49は口縁部に明瞭な屈曲を持ち、口縁端部に面を作るもの。46は体部外面をハケ調整し、体部内面を板状工具で調整する。50~51はS字状口縁付壺(以下、「S字壺」)の口縁部である。50は口縁部が全体的に外反し、端部に面を持ち、外面には刺突文を施す。51は同じく口縁部が全体的に外反するが、外面の刺突文は押し引き状に施されており、S字壺A類の様相を呈する。52は壺の体部片で、外面は細かいハケによって調整される。53~60は壺の脚台部である。53は外面をハケ調整する。56は低い台部をもつもので、古い様相を呈するため混入品の可能性がある。60は直線的な脚台部をもち、外面ともにしっかりとハケ調整を施す。

61は手形土器である。破片資料であるため全体像をうかがい知ることはできないが、緩やかに円を描く窓をもつもので、中島氏の分類による鉢部形態B類に相当する。⁽²⁾

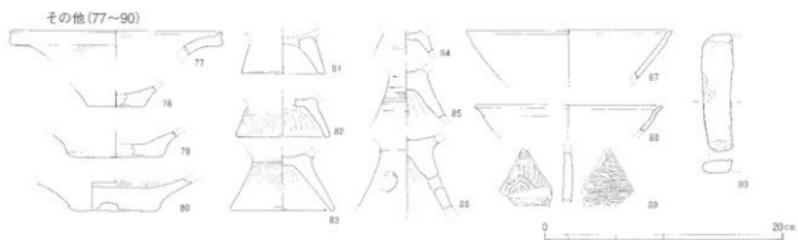
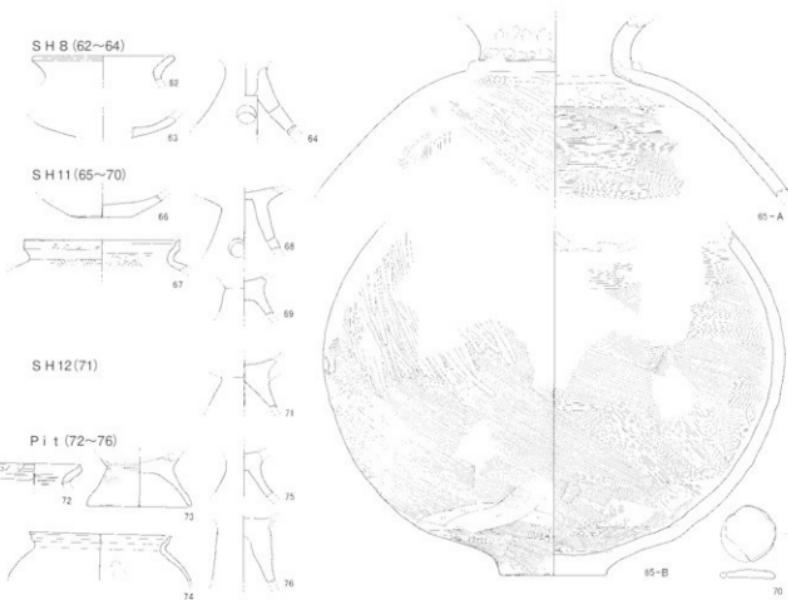
S H 4 土器群は、その組成や壺・高坏の形態などから、上村編年VI様式期後半に相当し、廻間I式期後半段階に位置づけられる。

S H 8 出土遺物(62~64) S H 8 墓出土遺物は、3点が同化できた。62は「く」の字状口縁壺の口縁部である。63は高坏脚部である。64は高坏脚柱部で、穿孔が1カ所残存する。

S H 11 出土遺物(65~70) 65は大型の壺で、65-Aと65-Bは同一個体であるが、接点がなかったことから別々に同化を行った。体部は球形状を呈し、底部は平底である。体部外面に加飾は見られず、頭部に巡っていたであろう突帯は剥離している。体部外面は、下半部をハケのちナデ調整したのち、上半部に斜め方向のミガキを施す。体部内面は、外面と同



第11図 出土遺物実測図(1) (6は1:2、他は1:4)



第12図 出土遺物実測図(2) (1:4)

一の工具を用いてハケ調整し、肩部の内面はオサエによって成形している。66は壺の底部片で、平底である。

67はS字彫A類の口縁部である。口縁部上段はほぼ垂直に立ちあがり、口縁端部上方に面をもたないもの。口縁部外面に押し引き刺突文が施される。

68～69は高坏脚部で、加飾はみられない。70は、弥生土器の加工凹盤である。

S H12出土遺物(71) S H12は、1点のみ図化できた。71は高坏の脚部で、残存状況は悪い。

3 その他の出土遺物

ピット出土遺物(72～76) 72は壺の口縁部で、口縁部外面にヘラ描きによる山形文と直線文が施され、頭部内面は強いハケ調整がみられる。73～74は壺。73は脚台部で、外面は細かいハケ調整である。74はS字彫のB類である。75～76は高坏脚部である。

表面採集遺物(77～90) 調査区周辺で採集した遺物である。77～87は弥生土器である。77は壺の口縁部で、大きく外反したのち端部を上方につまみ上げる。78～80は壺の底部で、いずれも底部中央が凹んでいる。81～84は壺の脚台部で、82・83の外面はハケによる調整である。85・86は高坏脚部。85は脚部上半部に櫛描直線文が施される。87は高坏環部で、

緩やかに外反し、口縁端部には弱い面が認められる。

88は灰釉陶器椀である。口縁部のみであるが、時期は植崎・斎藤編年の黒菴90巻式期に相当し、9世紀後半から10世紀初頭頃と考えられる。^[3] 89は須恵器壺の体部片である。体部外面は擬格子状タタキ、体部内面は同心円状タタキのちケズりが施される。90はすり石と考えられるもので、表面に擦痕がある。

【註】

- (1) 当該期の土器編年については、下記の文献を参考とし、大枠の様式や時期的変遷は尾張地域に関する文献を参照した。
 - ・上村安生2002「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
 - ・赤塚次郎1990「考察」「巡回遺跡」愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎1997「巡回Ⅰ・Ⅱ式再論」「西上免遺跡」愛知県埋蔵文化財センター
- (2) 中島哲夫1992「手捺彩土器について」『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会／高橋一夫1998「手捺形土器の研究」六一書房
- (3) 植崎彰一・斎藤孝正1983「猿投空編年の再検討について」「愛知県陶磁資料館研究紀要」2 爱知県陶磁資料館、斎藤孝正1994「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心とした」『古代の土器研究－律令の土器様式の東西－』古代の土器研究会

第2表 出土遺物観察表(1)

報告番号 実測番号	器種・質等	区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1 1302	弥生土器 壺	A1区	SH1 (底)3.2	内:磨減 内:磨減	やや粗	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12	底部に穿孔5ヶ所残存	
2 1206	弥生土器 壺	B1区	SH3 (底)14.7	外:ナメ 内:コナデ	密	にぶい黄橙10YR6/4	底 10/12	底部穿孔	
3 1208	弥生土器 壺	B1区	SH3 (脚台)6.3	外:ハケヌメ 内:ハケヌメ	密	にぶい橙7.5YR6/4	脚台部 4/12		
4 1205	弥生土器 壺	B1区	SH3 (脚台)7.5	外:ハケヌメ 内:ナメ	密	明赤褐5YR5/6	脚台部 1/12		
5 1203	弥生土器 高坏	B1区	SH3 (口)19.0	外:磨減 内:磨減	密	明赤褐5YR5/6	口縁部 2/12		
6 1305	石器 石器片	B1区	SH3 (高)2.6 (幅)14	-	密	-	はげ 完形		
7 0505	弥生土器 壺	B1区	SH4 (口)13.0	外:ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→突帯貼付	密	橙5YR6/8	口縁部 1/12		
8 0502	弥生土器 壺	B1区	SH4 (口)15.2	外:ヨコナデ 内:ナデ	密	黄橙10YR7/8	口縁部 5/12		
9 0401	弥生土器 壺	B1区	SH4 (頭)8.6	外:磨減 内:磨減	密	橙5YR7/6	頭部 1/12		
10 0501	弥生土器 壺	B1区	SH4 (口)15.2	外:ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→突帯貼付	密	外:橙7.5YR6/8 内:黄橙10YR7/8	口縁部 5/12		
11 0803	弥生土器 壺	B1区	SH4 小片	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ→ミガキ?→突帯貼付	やや粗	外:橙5YR7/6 内:橙5YR7/6	小片		
12 0705	弥生土器 壺	B1区	SH4 (口)15.3	外:ヨコナデ→ミガキ? 内:ヨコナデ	やや粗	外:明赤褐5YR5/6 内:にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12		

第3表 出土遺物観察表(2)

報告書番号	実測番号	器種・質等	区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
13	1103	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)136	外:磨滅 内:磨滅	粗	灰白25Y7/1	底部 3/12	
14	1101	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)128	外:磨滅 内:磨滅	粗	にぶい黄褐色10YR7/4	口縁部 1/12以下	
15	1104	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)159	外:磨滅 内:磨滅	粗	橙75YR7/6	11縁部 10/12	
16	1102	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)193	外:磨滅 内:磨滅	粗	明黃褐色10YR7/6	11縁部 2/12	
17	0504	弥生土器 脱離蓋	B1区	SH4	(II)104	外:ナガエ・ナデ→穿孔 内:ナガエ・ナデ	密	外:橙5YR7/8 内:橙10YR6/6	11縁部 2/12	穿孔は貫通せず
18	1204	弥生土器 蓋	B1区	SH4	小片	外:円形浮文・竹管文 内:ナデ	密	橙75YR6/6	小片	
19	0901	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)50	外:ナデ 内:ナデ	粗	明黃褐色10YR6/6	底部 12/12	
20	0304	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)60	外:摩滅 内:摩滅	密	橙5YR6/6	底部 12/12	
21	0306	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)58	外:摩滅 内:摩滅	密	橙75YR7/6	底部 5/12	
22	1002	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)56	外:ナデ 内:ナデ	粗	外:橙5YR6/6 内:褐灰10YR5/1	底部 8/12	
23	0903	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)70	外:磨滅 内:磨滅	やや粗	橙75YR6/6	底部 1/12	風化著しい
24	0701	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)50	外:ナデ 内:ナデ	粗	外:灰黃褐色10YR5/2 内:橙75YR7/6	底部 1/12	
25	1003	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)45	外:ナデ 内:ナデ	やや密	外:にぶい黄褐色10YR6/4 内:にぶい75YR6/4	底部 11/12	風化著しい
26	0905	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)52	外:磨滅 内:磨滅	粗	明黃褐色10YR7/6	底部 12/12	風化著しい
27	1108	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)35	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	橙75YR6/6	底部片	
28	0303	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(底)33	外:ハケメ→オサエ 内:摩滅	密	にぶい橙75YR6/4	底部 12/12	
29	0204	弥生土器 小型蓋	B1区	SH4	(底)14	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	にぶい黄褐色10YR7/3	底部 完形	ミニチュア製品
30	0406	弥生土器 鉢	B1区	SH4	(脚)44	外:オサエ・ナデ 内:オサエ・ナデ	密	橙75YR8/4	脚柱部 3/12	
31	0602	弥生土器 高環	B1区	SH4	(II)227	外:直線文→磨滅 内:シボリメ→磨滅	密	橙75YR6/8	115/12 底7/12	風化著しい 3方透かし
32	0506	弥生土器 高環	B1区	SH4	(II)160	外:ミガキ 内:ミガキ	密	橙75YR6/8	11縁部 3/12	
33	0601	弥生土器 高環	B1区	SH4	(棲)106	外:磨滅 内:磨滅	密	明赤褐色25YR5/8	脚部 2/12	風化著しい
34	1202	弥生土器 高環	B1区	SH4	(脚)22	外:ヨコナデ 内:板ナデ	密	黑褐10YR3/2	脚部 12/12	
35	0402	弥生土器 高環	B1区	SH4	(脚)44	外:直線文→磨滅 内:モリ	密	橙5YR7/6	脚柱部 1/12	
36	0405	弥生土器 高環	B1区	SH4	(底)34	外:直線文→磨滅 内:モリ	密	橙25YR6/8	脚柱部 11/12	3方透かし
37	0305	弥生土器 高環	B1区	SH4	(脚)40	外:ハケメ→直線文 内:モリ	密	橙5YR6/6	脚柱部 6/12	3方透かし
38	1004	弥生土器 高環	B1区	SH4	(脚)43	外:ナデ 内:シボリメ	粗	明赤褐色5YR5/6	脚部 12/12	3方透かし
39	0307	弥生土器 高環	B1区	SH4	(脚)33	外:摩滅 内:摩滅	密	橙75YR7/6	脚柱部 12/12	
40	0403	弥生土器 高環	B1区	SH4	(脚)34	外:摩滅 内:摩滅	密	浅黃橙75YR8/6	脚柱部 10/12	3方透かし
41	0404	弥生土器 高環	B1区	SH4	(底)74	外:摩滅 内:ハケメ	密	橙5YR7/6	脚柱部 3/12	
42	0904	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)91	外:磨滅 内:磨滅	粗	橙75YR6/6	口縁部 3/12	風化著しい
43	0802	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)124	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	やや粗	にぶい黄褐色10YR5/3	11縁部 2/12	
44	0902	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)144	外:磨滅 内:磨滅	やや粗	にぶい黄褐色10YR5/3	11縁部 1/12	風化著しい
45	1001	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)141	外:ハケメ→磨滅 内:ナデ	やや粗	にぶい橙75YR6/4	11縁部 2/12	風化著しい
46	0503	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)137	外:ハケメ→ヨコナデ 内:板ナデ→ヨコナデ→空窓貼付	密	明黃褐色10YR7/6	11縁部 2/12	
47	1106	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)138	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや粗	明黃褐色10YR6/6	11縁部 4/12	
48	0806	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)166	外:ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	やや密	外:にぶい橙75YR5/4 内:明黃褐色10YR7/6	11縁部 2/12	
49	1201	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)160	外:ヨコナデ→剥目 内:ヨコナデ	密	橙75YR6/6	11縁部 1/12	
50	0704	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)140	外:ヨコナデ→剥目 内:ヨコナデ	やや粗	外:にぶい橙5YR5/6 内:にぶい黄褐色10YR7/4	11縁部 1/12	
51	1207	弥生土器 蓋	B1区	SH4	(II)150	外:ヨコナデ→剥文 内:ヨコナデ	密	明黃褐色10YR6/6	11縁部 1/12	

第4表 出土遺物観察表(3)

報告書番号	実測番号	器種・質等	区	遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
52	0743	弥生土器 覆	B1区	SH4	(削)13.6	外:ハゲメ 内:ナデ	粗	にぶい黄褐色10YR5/3	頭部 3/12	
53	0742	弥生土器 覆	B1区	SH4	(縫合)4.6	外:ハゲメ 内:ナデ	粗	にぶい黄褐色10YR5/3	接合部 12/12	
54	0342	弥生土器 覆	B1区	SH4	(縫合)4.7	外:磨滅 内:磨滅	やや密	にぶい黄褐色7.5YR7/4	脚台部 3/12	
55	0746	弥生土器 覆	B1区	SH4	(縫合)6.0	外:ナデ 内:ナデ	粗	外:橙5YR6/6 内:橙7.5YR7/6	接合部 2/12	風化著しい
56	0301	弥生土器 覆	B1区	SH4	(底)5.7	外:磨滅 内:磨滅	やや密	橙5YR6/6	脚台部 3/12	
57	0801	弥生土器 覆	B1区	SH4	(縫合)5.1	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	明黄褐色10YR7/6	接合部 12/12	
58	1147	弥生土器 覆	B1区	SH4	(縫合)5.7	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	にぶい黄褐色10YR6/4	接合部 12/12	
59	0805	弥生土器 覆	B1区	SH4	(縫合)5.6	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	粗	明黄褐色10YR7/6	接合部 6/12	風化著しい
60	1045	弥生土器 覆	B1区	SH4	(脚台)9.6	外:ハゲメ→ヨコナデ 内:ハメメ→ヨコナデ	粗	外:浅黄褐色10YR8/4 内:暗灰N3/	脚台部 完形	
61	1145	弥生土器 土器	B1区	SH4	(体)19.6	外:ハゲメ 内:ハメメ	やや密	明赤褐色5YR5/6	体部 1/12	
62	1249	弥生土器 覆	B1区	SH8 主柱穴	(口)12.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	明黄褐色7.5YR5/6	口縁部 2/12	
63	1304	弥生土器 高環	B1区	SH8	(縫)12.0	外:磨滅 内:磨滅	密	外:橙5YR6/6 内:灰黄褐色10YR5/2	ほぼ 完形	
64	1343	弥生土器 高環	B1区	SH8	(脚)3.5	外:磨滅 内:磨滅	密	明赤褐色5YR5/6	口縁部 1/12	透孔1か所残存
65	0201	弥生土器 覆	C1区	SH11	(削)15.0	外:ハゲメ→ミガキ→ナデ 内:ハメメ→オサエ・ナデ	密	外:にぶい黄褐色10YR7/4 内:暗灰黄2.5Y4/2	底足部 4-12	65-Aと65-Bは同一個体 の可能性が高い。
66	0205	弥生土器 覆	C1区	SH11	(底)5.2	外:磨滅 内:磨滅	密	橙7.5YR7/6	底部 3/12	
67	0202	弥生土器 覆	C1区	SH11	(口)12.0	外:ハゲメ→刺突	密	にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部 1/12	S字型A類
68	0203	弥生土器 高環	C1区	SH11	(脚)3.9	外:磨滅 内:磨滅	やや密	橙2.5YR6/8	脚柱部 12/12	3方透かし
69	0207	弥生土器 高環	C1区	SH11	(脚)3.3	外:磨滅 内:磨滅	密	橙5YR6/8	頭部 12/12	
70	0206	弥生土器 凹加工	C1区	SH11	(長)4.6	外:磨滅 内:磨滅	密	にぶい黄褐色10YR7/3	ほぼ 完形	
71	1341	弥生土器 高環	A1区	SH12	(脚)4.0	外:磨滅 内:磨滅	やや密	橙7.5YR6/6	口縁部 2/12	
72	1402	弥生土器 覆	B1区	Pit8	小片	外:ナデ→刻目 内:腹ナデ?	密	外:黄灰2.5Y6/1 内:5Y7/1	口縁部 片	
73	1406	弥生土器 高環	B1区	Pit24	(脚)2.8	外:ナデ 内:ナデ	密	黄褐色10YR7/8	脚柱部 12/12	
74	1401	弥生土器 高環	A1区	Pit1	(脚)4.4	外:ナデ 内:ナデ	密	明黄褐色10YR6/6	脚柱部 2/12	
75	1403	弥生土器 覆	B1区	Pit11	(口)12.0	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	外:明黄褐色2.5Y6/6 内:黒褐色2.5Y3/1	口縁部 2/12	
76	1405	弥生土器 覆	B1区	Pit23	(脚台)8.8	外:ハゲメ 内:ナデ	密	橙7.5YR6/8	脚台部 2/12	
77	1505	弥生土器 覆	-	表探	(口)17.8	外:ハゲメ→ヨコナデ 内:ハメメ→ヨコナデ	密	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12	
78	1601	弥生土器 覆	-	表探	(底)4.6	外:磨滅 内:磨滅	やや密	明黄褐色10YR7/6	底部 2/12	
79	1602	弥生土器 覆	-	表探	(底)8.0	外:磨滅 内:磨滅	やや密	外:橙5YR6/8 内:橙5YR6/6	底部 3/12	
80	1605	弥生土器 覆	-	表探	(底)7.6	外:ナデ 内:ハゲメ	密	外:橙5YR6/8 内:にぶい黄褐色10YR6/4	脚台部 8/12	
81	1604	弥生土器 覆	-	表探	(脚台)9.0	外:磨滅 内:磨滅	密	橙7.5YR6/6	脚台部 1/12	
82	1603	弥生土器 覆	-	表探	(脚台)8.0	外:ハゲメ 内:ナデ	密	にぶい黄褐色10YR5/4	脚台部 2/12	
83	1502	弥生土器 覆	B1区	表土 掘削	(脚台)8.8	外:ハゲメ 内:ナデ・工具痕	密	外:明黄褐色10YR6/6 内:橙7.5YR6/8	脚台部 2/12	
84	1503	弥生土器 覆	-	表探	(脚)3.8	外:ハゲメ 内:ナデ	密	橙7.5YR6/6	脚台部 12/12	
85	1504	弥生土器 高環	-	表探	(脚)3.2	外:鵝塗直線文 内:シボリメ	密	橙7.5YR6/8	脚柱部 12/12	
86	1501	弥生土器 高環	B1区	表土 掘削	(脚)4.4	外:磨滅 内:磨滅	密	明黄褐色10YR7/6	脚柱部 12/12	3方透かし
87	1506	弥生土器 高環	-	表探	(口)17.4	外:磨滅→ヨコナデ 内:磨滅→ヨコナデ	密	橙7.5YR6/8	口縁部 2/12	
88	1606	灰陶陶器 椎	-	表探	(口)15.8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	外:にぶい黄褐色10YR7/2 内:黄褐色2.5Y5/1	口縁部 1/12	
89	1607	須恵器 覆	-	表探	小片	外:楕円格子状タタキ 内:同心円状タタキ→ケズリ?	密	灰白7.5Y7/1	小片	
90	1608	石器 すり石?	-	表探	(長)9.5	表面に擦痕あり	-	-	小片	残重量50.24g

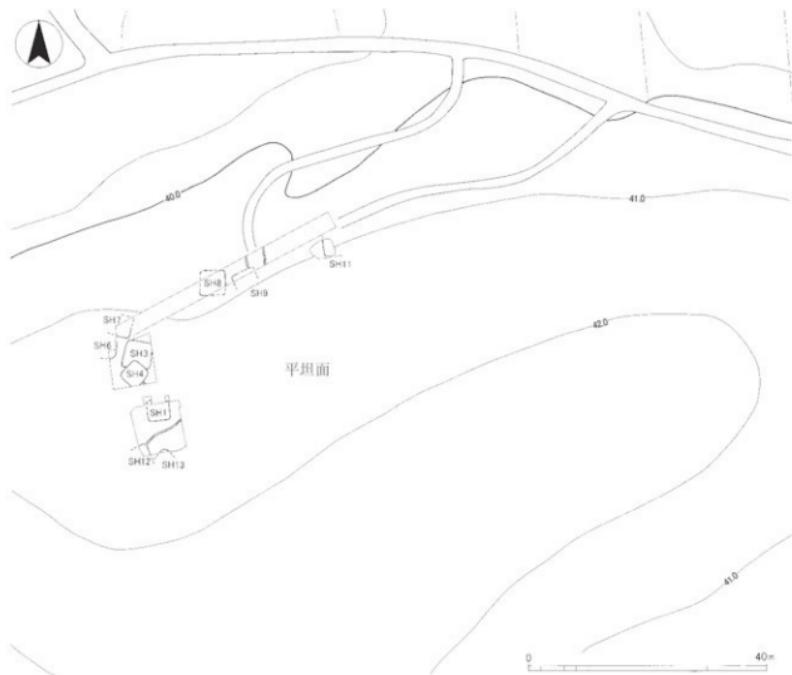
V 調査のまとめ

1 弥生時代集落の様相

東ノ谷遺跡では弥生時代終末期の竪穴住居10棟が確認された。調査区は丘陵上の平坦面から丘陵裾へ傾斜する斜面上に位置するため、調査区の南東側に広がる平坦部には、さらに多くの竪穴住居が展開していると推測され、地表面には遺物が散布する(第13図)。現況で畠地として利用されている平坦面の面積は約4,000m²で、遺跡全体の面積は約45,000m²であるため、少なくとも100棟弱の竪穴住居が形成されていた可能性が高い。

遺跡全体を調査したわけではないため、全体像は明確ではないが、ここでは集落の様相を概観したい。

存続時期 調査区はその多くが削平を受けており、遺物が伴い時期がわかる遺構は少ない。SH4床面直上からは、S字窓A類のほか完形の高壙など良好な資料が出土しており、廃絶時期は廻間I式期後半と考えられる。SH11はC区で一隅のみ確認できた竪穴住居であるが、A区・B区に比べ遺物の残存状況は良く、焼土付近の床面からSH4とはほぼ同時期の土器が出土した。SH4、SH11以外の竪穴住居は出土資料に乏しいが、いずれの破片も概ね廻間I



第13図 竪穴住居分布図 (1:800)

式期後半の範疇におさまるものである。

堅穴住居の多くは近接しており、同時期に建つことが不可能なものがみられる。例えばSH12とSH13、SH3とSH7、SH8とSH9などは各々距離にして数mも離れておらず、SH3・SH4が重複していることからみても、建て替えが複数回行われたことがわかる。堅穴住居が埋没したのち建てられた掘立柱建物についても、堅穴住居とたいして時期差はないものと考えられる。

その他の出土遺物から集落の存続時期を検討すると、まずSH4の混入品と考えられる高坏（第11図35）や台付甕（同56）がやや古い様相を示しており、廻間I式前半段階まで遡る可能性が高い。一方、ピット出土のS字甕（同76）は口縁部外面に刺突文をもたないB類で、廻間II式期の様相を示している。したがって、東ノ谷遺跡では廻間I式期前半に集落が営まれはじめ、廻間I式期後半頃に最も多くの堅穴住居・掘立柱建物が並び、廻間II式頃には小規模なものとなっていくと考えられる。

堅穴住居の規模と構造（第2表・第14図） 狹い調査区であったため、プランの全体像を窺い知ることができるのは少ないものの、いずれも正方形プランと考えられる。

堅穴住居の規模は、大小2つの大きさに分類される。SH3とSH8は1辺約5mを測る比較的大きな住居で、SH1やSH4は一辺4mの小規模なものである。

主柱穴は4本の柱で支えるタイプが主体であるが、SH4は3本の柱穴のみ確認された。また、主柱穴を支える控柱と考えられるピット⁽¹⁾はSH1とSH9で検出され、そのほかの堅穴住居では控柱と認定できるものはなかった。壁を構成する穴と考えられる小ピットは、SH1やSH3、SH4で壁際溝の上ないしはその周辺にみられた。

炉跡と考えられる焼土の位置は主柱穴の内側にみられるパターンが多いが、必ずしも住居の中央部であるとは限らない。SH3では、焼土と貼床が主柱穴で囲まれた住居中心部分で確認された。一方、SH4では焼土と貼床が住居の中心を避けるような位置で確認でき、SH7やSH9でも貼床範囲は住居の隅にみられた。

次に、住居全体の構造がわかっているSH3とSH4を比較する。比較的大きな面積をもつSH3は、貯蔵穴を持ち住居中心部に生活痕跡がみられるのに対し、SH4は床面積が狭く、貼床範囲と焼土の位置がまばらで貯蔵穴はみられなかった。この2棟は重複関係にあることから同時に並立していたものではないが、遺跡内において平面形態が複数あったことが指摘され、家族形態や用途によって使い分けがなされていたことが推測される。

当該地の弥生時代集落 東ノ谷遺跡周辺の丘陵部は、大規模な集落は認められないものの、発掘調査時に遺物が点的に出土しており、地表面でも弥生土器が採集されている。

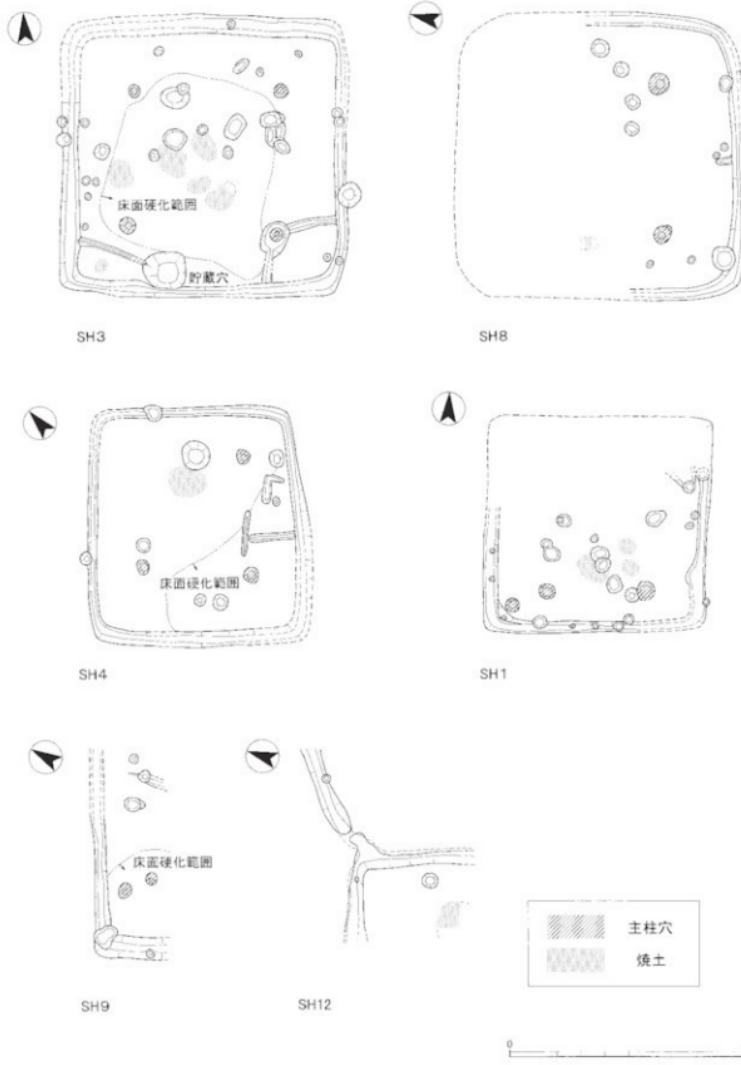
東ノ谷遺跡から谷を挟んで対岸の丘陵上に位置する平林東遺跡では、終末期の高坏や甕が見つかっている。⁽²⁾ 現集落内から弥生時代後期の壺が見つかった堤遺跡は東ノ谷遺跡と同一丘陵上に位置しているが、遺跡が面している谷は丘陵の反対側である。⁽³⁾ このことから、当地の弥生時代後期～終末期の集落は、佐奈川と外城田川の間に形成された小さな谷間を利用しながら、谷に面した低位丘陵の傾斜面もしくはその裾部に沿って形成されていたと考えられる。

2 弥生土器の様相

東ノ谷遺跡は丘陵部に位置していることから土器の残存が悪く、器壁表面の調整は風化しており不明瞭である。しかしながら、今回の調査では遺構に伴った遺物が出土しているため、若干の傾向を探ってみたい。

まず、広口壺は口縁部が単純に外反するもので、端部の拡張はない。口縁端部に面をとるタイプは頭部に簡単な突帯をもち、口縁端部を丸くおさめるものには加飾がみられない。同時期の伊勢市中楽山遺跡SB1・SX1⁽⁴⁾でみられるような口縁端部外面の刺突文や肩部の直線文は東ノ谷遺跡では認められず、壺類全体を通じて加飾傾向が少ない。

口縁端部外面に粘土帶を貼付ける、もしくは口縁端部を大きく折り返すタイプの壺（8・9）は、津市雲出鳥貫遺跡⁽⁵⁾や鈴鹿市八重垣神社遺跡⁽⁶⁾で類似する壺が出土している。胎土から在地産と考えられるものの、その形態は遠江など東の影響が想定される。



第14図 東ノ谷遺跡の竪穴住居 (1 : 80)

甕の口縁部形態については、S H 4 出土資料で形態がわかる9点のうち7点が受口状を呈しており、S字甕は2点、「く」の字状口縁甕は0点であった。S H 8 は「く」の字状口縁甕が1点、S H 11 はS字甕1点である。前述の中楽山遺跡では「く」の字状口縁甕とS字甕が主体となり、受口状口縁甕は散見する程度である。時期的・地域的な差までは見出すことができないが、東ノ谷遺跡に限って言えば、受口状口縁甕が主体であるといえそうである。また、甕の底部形態は、ほとんどが脚台をもつものと考えられる。

3 まとめと今後の課題

今回の調査では弥生時代終末期の堅穴住居と掘立柱建物を検出し、多気町から玉城町にかけて形成された低位丘陵における当該期の集落を検討する上で大きな成果を得ることができた。

東ノ谷遺跡登録の契機は石器の採集であったが、今回、古墳時代の須恵器や平安時代の灰釉陶器が採集されたことは特筆される。須恵器片については、同一の丘陵上にある森出古墳群や、外城田窯址群のなかでも最も早くから操業した北ノ山A須恵器窯との関わりを含め、考えていく必要があろう。⁽⁷⁾

東ノ谷遺跡の遺跡範囲は、周辺の集落遺跡のなかでは比較的大きな面積を有している。調査は工事立会の形で実施され、調査期間の確保が難しいなか行われたが、今回見つかった堅穴住居群は、当地の遺跡群を評価するにあたり貴重な調査事例となろう。

【註】

- (1) 同じ弥生時代後期の事例として、天花寺丘陵内遺跡群で控柱を作り堅穴住居が見つかっている。三重県埋蔵文化財センター2006「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告V」、同2005「天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ」など。
- (2) 三重県埋蔵文化財センター2008「平林東遺跡発掘調査報告」
- (3) 遺跡台帳による。
- (4) 三重県教育委員会1973「中楽山遺跡」「昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」
- (5) 伊藤裕作氏のご教示による。雲出島貴遺跡S D532上層、同 S Z504-2面上(三重県埋蔵文化財センター 2001『鷲坂Ⅲ』)などに類例がみられる。
- (6) 三重県埋蔵文化財センター 2001『河曲の遺跡』
- (7) 淩生卓司2005「伊勢南部の須恵器生産－外城田窯址群の検討－」『Mie history』Vol.16 三重歴史文化研究会

写真図版 1

調査前風景・A区検出状況



調査前風景（北から）



A区検出状況（西から）

写真図版 2

A区全景・SH 1



A区全景（西から）



SH 1（北西から）

写真図版 3

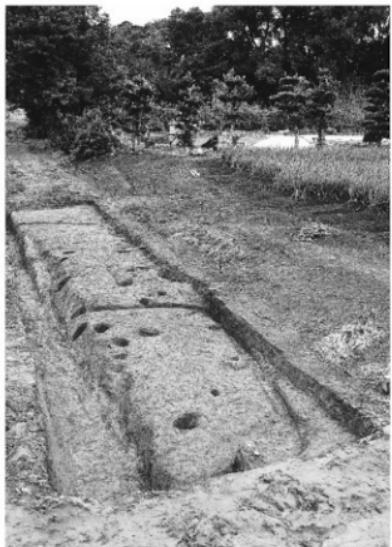
B区全景
(1)
(2)
(3)



B区全景(1) (北から)



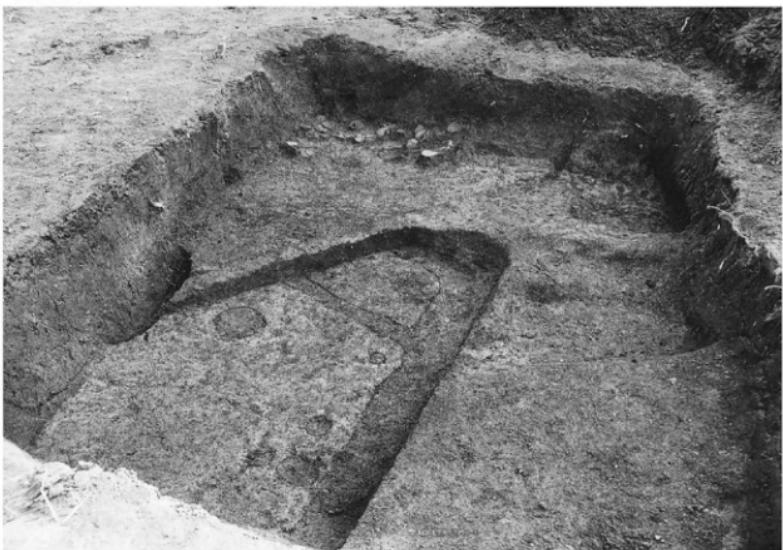
B区全景(2) (南西から)



B区全景(3) (南西から)

写真図版 4

S H 3 検出状況・S H 3・S H 4



S H 3 検出状況（北から）



S H 3・S H 4（南東から）

S H 4 遺物出土状況・主柱穴・S H 3貯蔵穴



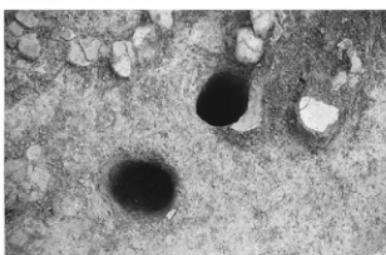
S H 4 遺物出土状況（北から）



S H 4 遺物出土状況（東から）



高环出土状況（東から）



S H 4 主柱穴（東から）



S H 3 貯蔵穴（北から）

写真図版 6

S D 2 · S H 8 · S D 10 · S H 12 · 作業風景



S H 8 (東から)



S D 10 (北東から)



S H 12 (北から)



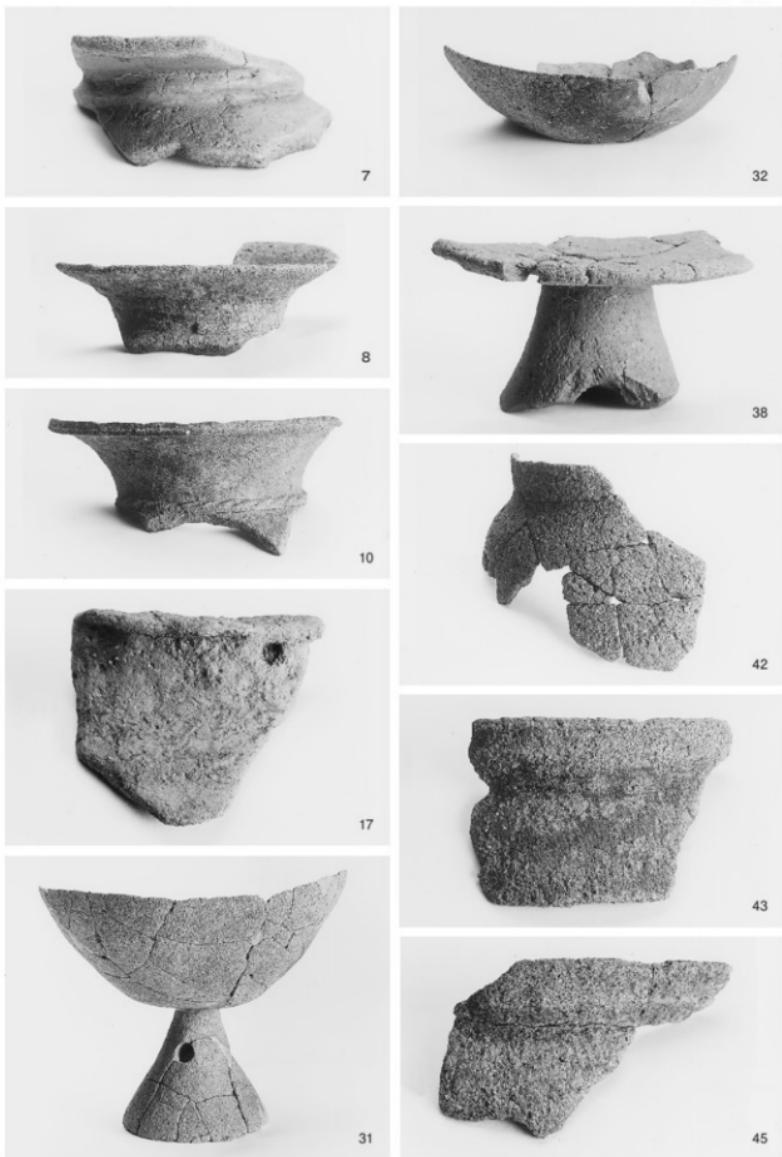
S D 2 (北から)



作業風景 (南から)

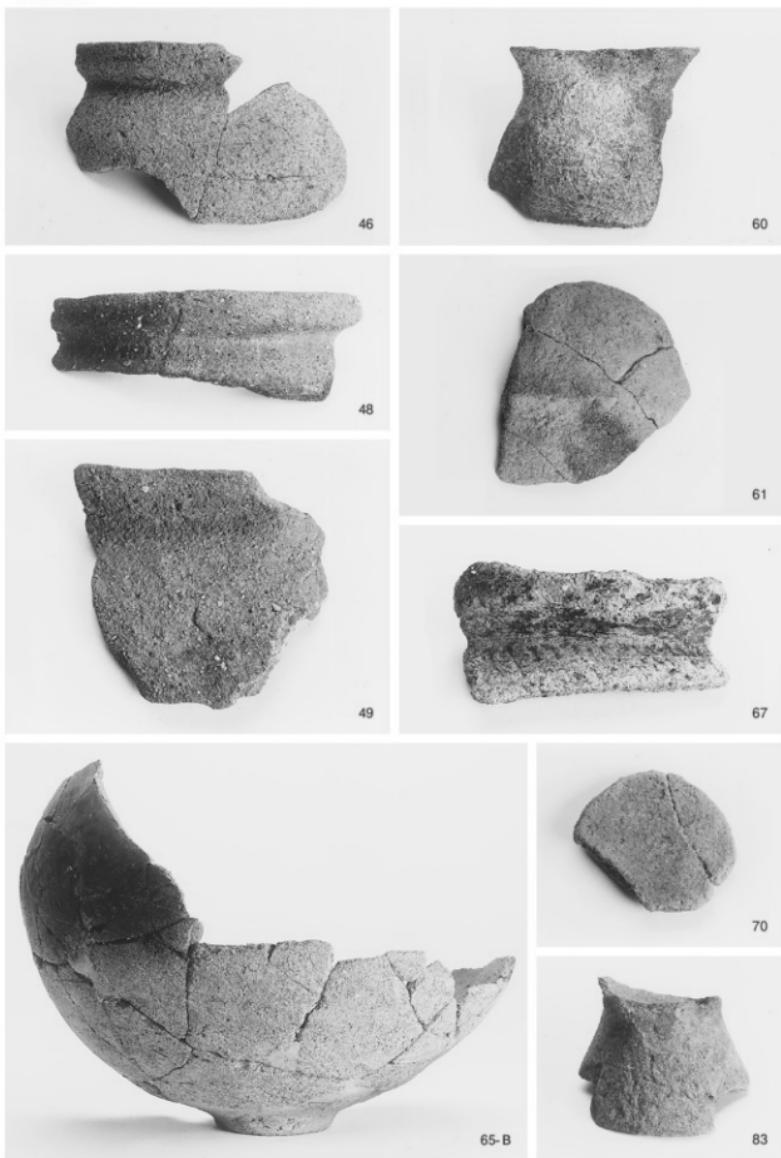
写真図版 7

出土
遺物
(1)



写真図版 8

出土遺物
(2)



報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告 350

東ノ谷遺跡発掘調査報告

2014(平成26)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 文 化 印 刷
